

2022年
12月

マナ通信



今月のマナ通信は、
◎10月の聖書日課（イザヤ書）
◎土・日曜日の学び（イスラエル王国の分裂）の感想です。

クビデ、ソロモンと栄えた王国も分裂の時をむかえます。神殿を建設したソロモンも、晩年には多くの側室を抱えるようになり、彼女らを通して偶像礼拝が入り込むと共に、子どもたちの間で相続権争いが起こりました。正室の子レハブアムは長老たちの意見を聞かず、民に重税を課し贅沢三昧を行って王として好ましくなかったのです。

しかし、側室の子ヤロブアムは、そうではなく人々はヤロブアムのもとに集まりました。こうして、ヤロブアムの北王国イスラエルと、レハブアムの南王国ユダとに大国は分裂してしまいました。

イザヤは南王国に当たる地に誕生した預言者で、ウジヤ王の死んだ年、紀元前742年頃に神から召命を受けその後50年もの年月を預言者として活動しました。北王国イスラエルの滅亡が紀元前722年、南王国エルサレムの陥落が紀元前597年、その後バビロニアに捕囚されて苦しみの中、紀元前539年にエルサレムへの帰還が許されました。従って、イザヤを通した神の預言から南王国ユダが実際に陥落するのはずっと後のことになるのです。

神はこの契約の民イスラエルがこのような不信仰に陥っていることを嘆き、民に悔い改めを迫ったのです。それは、決して契約の民イスラエルを滅ぼす為ではなく改心を迫ったのでした。そこで神は周辺の国を用いて、王国を打たせたのです。

その為、北王国イスラエルはアッシリヤに滅ぼされ、南王国ユダもバビロニアに破れ、捕囚されることになってしまいました。しかし、イスラエルはあくまでも神との契約の民でした。

ここには、2つの大きな特典があったのです。1つはアブラハム契約で、アブラハムの折れることの無い強い信仰に対して、神はカナンの地を与えたこと、そこに多くの子孫を残すようにしたこと。

次に、神はカナンの地を目指すイスラエルの民にシナイ山でモーセを通してシナイ契約、律法を与えました。この律法に対して従順であれば神は祝福を与え、逆に不従順の場合にさばきを与えるのです。これが神の律法です。しかし、神は愛ある方です。だからイザヤは預言しました。イザヤ書は捕囚の地にある人々に対する慰めの書なのです。

「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。——あなたがたの神は仰せられる——

エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その苦役は終わり、その咎は償われている、と。そのすべての罪に代えて、二倍のものを【主】の手から受けている、と。」

このようにして【主】の栄光が現されると、すべての肉なる者がともにこれを見る。まことに【主】の御口が語られる。「叫べ」と言う者の声がする。「何と叫びましょうか」と人は言う。「人はみな草のよう。その栄えはみな野の花のようだ。【主】の息吹がその上に吹くと、草はしおれ、花は散る。まことに民は草だ。草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことは永遠に立つ。」

（イザヤ40:1-2,5-8）

戦いに敗れバビロニアの地で打ちひしがれた生活を送っているであろう人々に癒やしの言葉を掛けています。苦役は終わり、犠牲がささげられ、贖いが果たされた。償いの赦し以上の祝福が神からあります。叫べ、再びイザヤは声を聞きます。その内容は人のはかなさとは対照的な、神の言葉の確かさでした。

人の命はしぼんでいく花のようだ、いくら綺麗に咲き誇ってもいつかは枯れる。しかし、神の言葉は永遠に活きている。捕囚の地にある人々



は勇気づけられることでしょう。必ず、カナンの地エルサレムに帰れることを確信して。頑張れ、わたしの民よ！（畑中伸之）

イスラエルの聖なる神、主はこう語ります。「わたしに立ち返り、わたしの助けを待ち望みさえすれば、あなたがたは救われる。心を落ち着け信頼することが、あなたがたの力となるのだ。ところがあなたがたはそうしなかった。」（イザヤ30:15）

（耳の痛い言葉ですが、失敗して主に立ち返り、教えられます）

救いの時には、主自ら行動するので、民に必要なことは「落ち着いて」いること、「静かにして」いることなのです。それが主に信頼することなのです、と 10月10日（月）の「みことばを味わおう」にありました。

20節 あなたを教える方はもう隠れることはなく、あなたの目はあなたを教える方を見続ける。

21節 あなたが右に行くにも左に行くにも、うしろから「これが道だ。これに歩め」と言うことばを、あなたの耳は聞く。

問題はみことばを、み声を待つことをしないで行動してしまう自分であることを深く反省させられ、恐れます。

ヨハネ14章26節「助け主、すなわち父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したすべてのことを思い起こさせて下さいます。……心を騒がせてはなりません。」と救い主は幾重にも万全です。

主よありがとうございます。（福島三弥子）

イザヤ書は第5福音書とも言われているそうですが、中身が詰まっただけで、どこを感想として取り上げてもよいのやら、まとまりませんでした。

世界も日本も秩序が乱れて、カオスのような状態で心騒ぐ人（イザヤ35章4節）です。ニュースを見ると物価高、円高、コロナの第8波の予測、国連機能不全、北朝鮮のミサイル発射、ウクライナと露の戦争と心騒がせる状況を放映しまくりです。

「みことばを味わおう」の53頁「主の御言葉に傾聴するように」捉えられました。無力に見える時こそ主の御言葉に、頼ることのできる者とされている幸いを感謝します。

Ⅱ列王5章13節のナアマンの部下のまっとうな説得に感心すると共に、部下の意見に素直に応じるナアマンにも、普段のお互いの信頼があったのだと、ほのぼのとします。ナアマンに治って欲しいという部下の愛が強かったのでしょうか。

難しい方法ではなく、ただ主に全信頼をおき、ゆだねるという、素朴な信仰を忘れないようにしなければと、悔い改めました。（広瀬裕子）

神の愛は、御子をこの世に遣わされたことに見て取ることができる、とは言え、この世でのイエスの生涯、教え、奇跡（これらが栄光に富み、計り知れないほど尊いが）ではなく、「私たちの為に死んでくださった」ことに、神の愛を明らかにしていると、パウロは語っています。しかも単なる死ではなく、十字架という驚くべき特定の死の形なのです。

誰のために死なれたのか。なんと、弱く不敬虔で罪人、神の敵であった私たちの為に死なれたのです。罪の中にある私たちの罪を赦し罪の力から救い、神と和解し神の子とするためなのです。こんなことが人の間で考えられるでしょうか。



そのうえこの救いは今だけでなく、この先も日々継続し、将来の栄化までも保証してくださるものなのです。

いつまでも変わらない神の愛に基づいている以上、救いは確かでゆるぎないものですし、栄化が約束されているとはいえ、その途中にある今、見えるところでは困ったこと、問題等に悩まされますが、聖霊となって私たちの内に住んでくださるお方に信頼し、共に処してゆけるのですから、神の平安をいただきながら、神の愛に基づいた、救いと栄化を確信し、喜びつつ歩んでゆけることに大きな感謝をささげます。
(高橋美枝)

私たちの神、【主】よ。あなた以外の多くの君主が私たちを治めました。私たちはただあなただけを、あなたの御名を呼び求めます。彼らは死人であって、生き返りません。彼らは死者の霊であって、よみがえりません。それゆえ、あなたは彼らを罰して根絶やしにし、彼らについての記憶をすべて消し去られました。【主】よ。あなたはこの国民を増し加えられました。この国民を増し加え、ご自身の栄光を現し、この国のすべての境を広げられました。【主】よ。苦難の時に彼らはあなたを求め、あなたが懲らしめられたとき、彼らはうめきの声をあげました。子を産む時が近づいた妊婦が産みの苦しみに、もたえ叫ぶように、【主】よ、私たちは御前でそのようでした。私たちは身ごもり、産みの苦しみをしました。それはあたかも、風を産むようなものでした。私たちは救いを地にもたらさず、世界の住民はもう生まれてきません。あなたの死人は生き返り、私の屍は、よみがえります。覚めよ、喜び歌え。土のちりの中にとどまる者よ。まことに、あなたの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせます。」(イザヤ26:13-19)

以前の私は、その場しのぎで、ただわけのわからないまま神社等で手を合わせていました。その結果がどうであれ、自分が納得すれば、それで良しとしていました。

しかし、主はなんとすばらしいお方でしょう。真の神を信じた人、神と約束を結んだ人は、死んでも生きるのではないか、いや生きるのだ、とイザヤは希望を語ります。

すなわち、死んでしまったはずの私の肉体も「よみがえります」(19節)。いのちを与える主に期待する復活の信仰が与えられました。

私たち神に従う者は、必ず生き返ると確信します。そのような人の体はよみがえります。神の愛を感じる一節です。

「私たちの神、主よ、私たちも、あなたを、あなたの御名だけを呼び求めます。」

今日もどこかで争いがあり、世の指導者はそれらを治めることすら出来ません。神様、この世が悪に満ちていても、あなたは生きて働いておられます。大変ありがたいことです。あなたの真実に信頼して生きて行きたいと思います。(木村邦夫)



人はみな草のよう。その栄えはみな野の花のようだ。主の息吹がその上に吹くと、草はしおれ、花は散る。まことに民は草だ。草はしおれ、花は散る。しかし、私たちの神のことは永遠に立つ。」(イザヤ40:6-8)

この世の不確かさや、自分自身も何かあればすぐに揺らぐような頼りない存在であることを自覚させられる時、人は気持ちが沈んだり、それを否定したり改善の努力をしたりすると思います。

しかし、このみことばを頂いている私たちは希望を見出し、神様から頂く平安の中にあることができます。草や花は、その命は短いですが、生き生きとしています。私も主の恵みの中で生きたいと思います。(永井亮子)

何を私は語れるでしょう。主が私に語り、主が自ら行われたのに。私は自分のすべての年月、自分のたましいの苦しみのゆえに、ゆっくりと歩んで行きます。主よ、これらによって人は生きるのです。私の霊

のいのちも、すべてこれらに従っています。どうか私を健やかにし、私を生かしてください。」

(イザヤ38:15-16)

肉体を弱くし、死に至らしめようとする病すら、主からのものであるなら、その病が苦しいものであっても、その人の生に意味を与えるのです。(みことばを味わおうより)

試練の中にあっても、なお主の恵みである。私の味わった苦しみは平安のためであると語れたらどんなに幸いでしょう。

森住ゆきさんの10月号のマナの表紙画(ちぎり絵)を見ながら、ほっこりした時間を過ごしました。やはり、主の恵みは、私には十分です。(外處トミ)

あなたには わたしの恵みは 十分です
日々感謝して みことばに生きる

2022年10月31日



埼玉県の神川町にある城峯公園の紅葉の中に咲く冬桜

主はエジプトを撃たれる。主はこれを撃たれるが、またいやされる。それゆえ彼らは主に帰る。主は彼らの願いをいれて、彼らを癒される。」(イザヤ19:22)

主は私たちのために私たちを懲らしめ、そしていやして下さいます。私たちはそれによって主の存在と主の愛を知ります。主に信頼して歩んでいきたいです。(外處光歩)

何を私は語れるでしょう。主が私に語り、主が自ら行われたのに。私は自分のすべての年月、自分のたましいの苦しみのゆえに、ゆっくりと歩んで行きます。主よ、これらによって人は生きるのです。私の霊もいのちも、すべてこれらに従っています。どうか私を健やかにし、私を生かしてください。」

(イザヤ38:15-16)

日々多くのことがあります、聖書を通して慰めや励ましをいただけることは幸いです。神様は試練によっても私たちをみそばに導いてくださいますから感謝します。

これからもいつも主に目を向けて主とともに歩んでいきたいと思えます。(外處結実)

ああ、私の味わった苦い苦しみは平安のためでした。あなたは私のたましいを慕い、滅びの穴から引き離されました。あなたは私のすべての罪をあなたのうしろに投げやられました。(イザヤ38:17)

私たちキリスト者がこの世に生かされているのは、神様のご計画により救われた者として、神様のご栄光を現わすためであると言われている。「この世も世にあるものをも愛してはなりません。」とも命令されています。

主イエス様は、この世を父なる神様と共に創造された偉大なるお方であったにも関わらず、私たちを滅びから救うために、この世からは多くの苦しみを受け、肉体的には絶望と孤独の中で死に渡されました。ただ、唯一、父なる神様との交わりだけが支えとなられていました。

そして、主イエス様を救い主として信じた者には、神様から新しいのちが与えられましたが、救いの恵みの喜びと共に、死に至るまで従順であることも求められています。

私が今までに出会った主にある兄弟姉妹方も皆、この世にあっては絶望と孤独の人生へと導かれ、最後には主のみが希望であり支えとなった時に、天に召されたように覚えています。

それは、主にある者の共通した定めのように思われます。私たちもそのような人生の深みへと導かれてゆくように思いますが、それらは全て私たちからこの世への執着心を引きはがして、真の永遠の平安を与えるために必要なことと教えられます。(外處徳昭)



神の恵みの福音の真髄しんすいが預言されている箇所として有名なイザヤ53章を味わいました。ここには、主のしもべはなぜ苦難を受けなければならなかったのか、その理由が記されています。それは、私たちの罪のためであったということ、身代わりの死であったということです。

1節「私たちが聞いたことを、だれが信じたか。【主】の御腕はだれに現れたか。」

「私たちが聞いたこと」とは、神の救いに関する良い知らせ、福音です。このすばらしい福音を、いったいだれが信じたのでしょうか。ユダヤ人の多くは信じませんでした。なぜでしょうか？

イエスの姿が、彼らが想像していたメシア像とはあまりにもかけ離れていたからです。彼らが信じていたメシアとは、イスラエルを政治的にも、軍事的にも復興してくれる方でした。ローマ帝国の支配から自分たちを解放してくれる政治的メシアを待ち望んでいたのです。

1節のみことばは、ヨハネ12:37-38に引用されています。「イエスがこれほど多くのしるしを彼らの目の前で行われたのに、彼らはイエスを信じなかった。それは、預言者イザヤのことばが成就するためであった。彼はこう言っている。「主よ。私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。」とあります。

それは、この時からイエスは、ご自分が死なれることを語り始めたからです。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」死ぬなんて、そんな弱々しい者がメシアであるはずがないと言って、イエスから離れて行ったのです。

「主の御腕はだれに現れたか」主の御腕(救い)はこのようなしもべに現れたのです。見た目にはパッとせず、何とも弱々しく、干からびたようなそんなしもべに現れたのです。

2節には、「彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべ

き姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。」とあります。

この「ひこばえ」は、植物の根から最初に出る枝のこと。その枝は地面の下に根のように伸びます。「ひこばえのように生え出た」とは、他の何かに頼らなければ生きていくことができないような、弱々しい姿で生まれたという意味です。

また、「砂漠の地から出た根のように」ともあります。「砂漠の地から出る根」はカラカラに干からびています。もう死んだような状態になっています。そんな砂漠の地から出た根のように主のしもべは育ったのです。

「彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない。」のです。イエス・キリストには、私たちが見るべき姿も輝きもありませんでした。私たちが慕うような見栄えもなかったというのです。映画や聖画で見たキリスト像とは全く違います。

3節では「彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」とあります。

イエスは、病人をいやし、悪霊を追い出し、疲れた人、苦しんでいる人を慰めました。イエスは食する暇も忘れ、寝る間も惜しんで、人々のために身を粉にして仕えたのです。なのに人々は彼をのけ者にし、「十字架につけろ」と叫び続けたのです。

なぜ主のしもべはそれほどまでに蔑まれたのでしょうか？

4節「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。」

このしもべの罪や咎に対する神の懲らしめだと思っていたのに、実はそうではありませんでした。それは、私たちのためでした。「彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」のです。

5節「しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」とあります。

しもべが刺し通され、しもべが砕かれたのは、私たちの罪のためであり、私たちの咎のためだったのです。ここには、「刺され」とか「砕かれた」という言葉がありますが、これはまさに主のしもべであるイエス・キリストが受けた十字架の苦しみを表しています。

この預言はキリストが生まれる七百年も前に告げられたものですから、十字架を見て預言したわけではありません。しかし、さながら十字架のもとにたたずんで、十字架を見た人が語ったような描写です。

「私たちのため」というのは、英語では「for us」ですが、この「for」という言葉は「代わりに」と訳すこともできます。ですから、「私たちのために」ということは「私たちの代わりに」ということでもあるのです。彼が刺し通され、砕かれたのは、彼がそれほどの苦しみを受けられたのは、私たちの身代わりのためだったのです。彼への懲らしめによって、私たちはいやされ、彼の打ち傷によって、私たちはいやされたのです。

6節「……しかし、【主】は私たちすべての者の咎を彼に負わせた。」とあります。

神は全人類すべての者の罪・咎を彼に負わせました。全人類すべての者の罪のためです。

「この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」(Iヨハネ2:2)

何と感謝なことでしょうか。この世の人たちは十字架は愚かなことだったとか、失敗だったとかと言いますが、それは神の私たちに對する最高の愛の現れだったのです。(福島勲)

貴重なご感想をありがとうございました。

次回はマナ11月号の感想を12月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。(永井)

